

フンワリ空中に浮かんだ——といっても正確な表現ではない。が、しかし一万メートルという空には左右に比較するものがないし、雲も下の方にあるので俯瞰する以外には速さもわからないというのが、今の飛行機旅行の実感である。

幸いに窓に近い席が与えられて、右下に日本国土の何分の一かを一目に見おろして、短かすぎる映画のように西へ行ってしまう。何の奇もない話のようだが、太平洋上の機窓から見ていると富士山の北へモヤモヤと山が重なって立山なども見えるらしい。それもほとんど平らくらいに見えている果ての方に黒いくらいの濃い紺碧の線が見える。それが日本海だと判ったときには、貧しい財産を算えているように大事な大事な母国が、こんなにも小さいのかといったような感傷がチラリと頭のどこかをかすめる。まあ、成層圏外さえ飛ぶもののある時代に、高い所から見て下が小さく見えるといつては、軽く笑われてしまいうそなのでやめておく。もともと小さいのを承知で住んでいたんじゃないかと自分にいつて聞かせて、たちまち紀伊から四国、九州南端をかすめて奄美大島を横に見て東シナ海へ入る時分には、またなんと美事な海岸線の景色かと見惚れてもいた。

白い雲の切れめから下の方に海の碧さだけが見え、シーンとした機内は、みんな何か読んだりしているうちに、むかし日本一の高い山と誇称した新高山と、青々とした前後の山なみの美しい台湾が左に見えてきて、それも瞬く間、中国の福建省、広東省の境に近い辺から、平たい広い黄褐色の土地が右窓に広がっているのを見ると、香港の近そうな気配がする。

どの島の山かにきつとぶつかるかと思うと、サツと向きが換えられ、それが商売とはいいながら、鮮やかに山と島との間に挟まった狭いビクトリア海峡の香港空港へまず無事着陸、東京を出て三時間。

明治ことばでいえば、赤ゲット、江戸言葉ともなれば何と申すものやら、現代弥次喜多の悲しさおかしさか、空港の時刻では東京を発つ

てからまだ二時間しか経っていない——ハテナと考え、さつき時間を一時間遅れさせる注意のあったのを、ふと思いついた。時差という到着ぶくれ季節の通勤電車のことかと思つていたが。

十二月二十二日、今日は冬至、南瓜などを食つて炬燵にでもという日なのに、二十世紀後半の有り難さ、尻のながい人の茶話ぐらゐの間に、汗ばむような温かさの土地に立っている。そして空港の休憩室の方で、インド貨幣の両替をしたり、腕前のほども忘れて生意気に写真などを撮る。二階建てのバス、周囲の丘陵に立ち並ぶアパート群、いろいろな人種、白い土肌を出している四囲の島山、なんでも珍しくないものはない。「幼稚園の園児みたいに好奇心が強いね」と評した道づれもいた。ナントデモイナサイ。

しかしこの着陸の際に機窓をかすめて強烈な印象をうけたものは、九竜半島の斜面に吹き溜つたように、また貼り付けたようにも見えた広い面積の貧しい難民部落であった。これは帰路に再び立寄り一泊して雨中わざわざ見て歩いた蛋民の生活とともに、決して難民ばかりでないことも判つたけれど、それはまた。

給油だの、われわれに食べさせるおいしいものを積み込むと、同行二人のひとりと席を並べて、万国旗のはためく空港を發つてバンクックへ向かう。雲の切れめを抜けるようにして無数の島の群れている空港を昇りきると、しばらくは沈黙の濃い青色の海。そして鱗のようにながらびがった白い雲、白昼の寂寥といったさみしさの中に、ひたすら西へ西へと向かうらしい。

「いい齢をして、そんな知らない国を旅などして、西方も結構だが——そのまま西へ行きつきりになっちゃいけませんヨ」と念を押されたことなども、ふっと脳裏をかすめて、ニヤリと笑いが浮ぶ。

白っぽい海岸線の長く長く続いたところから陸地にかかる。無料でくれただけあって、チャックがとでもよく引つかかかって開かない手提げカバンを大急ぎ開けて地図を出して見ると、ここはとも南ベトナムの東岸らしい。海沿い、平地が過ぎると、ジャングルというもの俯瞰図の連続、ただ黒いような濃緑の密林つづき、この下で今仏教徒をいじめたり、また仏教徒に腹を立てさせたりしている内乱が、どの辺りで行われているのかなアと、眼をすえて見ても、こちらは天国に近い一万メートルという上空とても腹の立っているところなどは判らない。(つづく)